特集　“山の語り部”に聞く

《取材スケジュール》

平成13年11月14日		林	正一氏（金沢ナカオ山岳会代表）
11月17日		木下	幸雄氏（白山室堂元主任）
		力丸	茂穂氏（元白山室堂診療所所長）
11月26日		吉田	孝男氏（山とスキー店ケルン店主）
12月１日		根深	誠氏（登山家　フリールポライター）
12月16日		山下	忠氏（猟友会金沢支部　二又新町出身）
12月21日	（再）	力丸	茂穂氏（元白山室堂診療所所長）
	（特）	古川	脩氏（山路の会　故人）
平成14年１月23日	（再）	木下	幸雄氏（白山室堂元主任）

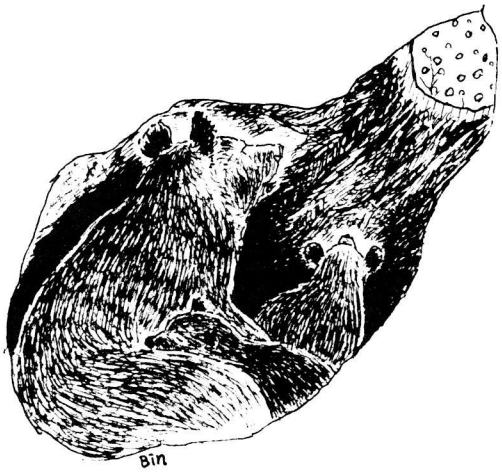
＊掲載順は内容のつながり具合などを勘案し、当方で入れ替えさせていただいています。

＊木下氏分は、編集進行の都合から、分割掲載にしてしまいました。
不手際の段、お詫び申し上げます。

上記の方々は私の勝手…（根深氏は番外）自分の山歴、人脈を通して、「山と関わり続けて来られた方々」として、選ばせていただきました。

木下氏、力丸氏については、室堂会所属の７期村田　泰恵先輩に橋渡しをしていただきました。

たかがＯＢ会の会報のために時間を割き、稚拙インタビューに答えていただいた皆様には、感謝の念に堪えません。



どの原稿も、ご本人には校閲いただきましたが、真っ赤になったものはありませんでした。

わずかの数字の手直しや、第三者に非礼になりそうな箇所の削除や、添加くらい…学生気分丸出しの私の切り口を、温かくご容赦いただいたものと解釈いたします。

稚拙なりに、人対人の言葉で語られる世界の中に、その方の「生きざま」…山に関わりつつの自己実現を描こうと試みました。

ただ、インタビューであった限りは、結局は私の器を越えられないものであったと思います。

上記の方々のほんの一部しか聞いていない、そしてあくまで「私がそう聞いた」にすぎないことを強調しておきます。

そうでありながら、「聞かねば、知ることが出来ない」も、重すぎる事実、そしてワクワクする体験でした。

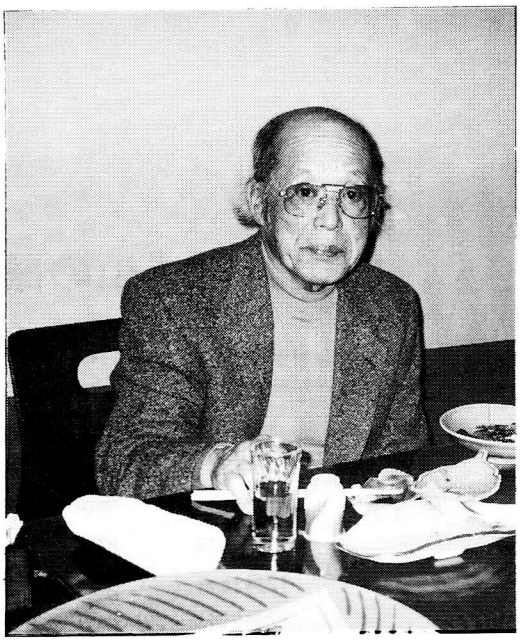
皆様には、私の気付かなかった分の失礼もお詫びし、重ねて感謝申し上げます。

（インタビュアー、文責：15期　舟田　節子）

木下　幸雄

（きのした　ゆきお）

略歴　大正13年生まれ。写真家。昭和27年より50年まで、白山室堂主任を勤める。



「『二代目　主任』ですと、弟の道雄の方と誤解されますから」

なるほど、こちらは「室堂主任職」には２年ほど前任者がいて、二代目が木下幸雄さん、三代目が道雄さんと分かってしまったから、いいが…。原稿の「二代目主任」を「元主任の方が」と訂正された木下さん。

白山室堂はそのように、白山観光協会が経営主体（国立公園になってからは…とか、厳密には付記がいろいろ必要だが）ながらも、木下さん兄弟が、それぞれ約30年ずつ、「主任」の重責を担ってきた。「木下」とは、室堂の歴史における「名跡」である。

ただ、「弟の方」と「誤解できる」方はまだマシな方。橋渡しを頼んだ７期村田先輩に、

「私が知ってるのはお兄さんの方だけど、それでいいのね」に、

「は？木下さんて、二人いるんですか？」

と、答えてしまった素っ頓狂な私。ちょっと考察してみれば、年令があうはずがないんである。しかし、＜私が知らないくらいなら、知らん人の方が多い！＞と、すぐ開き直れて、＜それなら、なおのこと、貴重な昔話を聞かなくっちゃ＞と前向きになれるのが私の長所である。

ここからの４ページは、とりあえず、11月17日のインタビューで、まとめてあった。２月のＯＢスキー合宿の公示に、このＯＢ会報が間に合うためには、そうでもしなければ段取りがつかない。１月23日インタビュー分を後編にして、現役分は別にページを打って…と、ない知恵をしぼったが…。結局全面訂正すべきと判断。よって、７ページで中断し、120ページへ「続く」というお粗末さ。

また、以上の理由により、校閲済みでない部分も多いが、重大なミスについては次号での訂正とさせていただく。

その替わり、木下氏が事実上の編集をされた昭和53年発行の白山観光協会発行「三十年のあゆみ」の方は、相当量を転載させていただいた。金大ワンゲルＯＢ、ならびに現役は、それらのページで、相応に白山、室堂の歴史ツウになれるものと思う。またそうであってほしい。

昭和23年、写真班だった木下さん（右端の軍服姿）。当時はこの規模の勤務員数だった。

昭和28年の室堂。
木下さんは28歳。主任２年目。
前列の左から２番目。
室堂診療班はこの時は、日赤の所轄。４人の診療班員、大工も交じる。服装にも当時がしのばれる。
カーバイドの街灯も見える。

血のつながった父母、祖父母であっても、その人の若い時代は想像しにくい。目鼻立ちに、否応なしの血縁を感じることがあっても、その人に子供時代、青年時代があったことはなかなか…。たっぷりの接触時間があってさえ、「親」と「子」の立場から、ものを言い、考えてしまう。

昭和27年…とお窺いしておきながら、私は青年木下さんではなく、目の前の木下さんと、当時は石室だったという室堂を重ねていた。そんなボタンの掛け違いを避けるべく、まず皆さんにも、青年木下さんを写真でご披露したい。

木下さんが室堂主任になられたのは昭和27年。軍服姿の写真が残っている。復員してきた時の冬の軍服。純毛で、それが一番暖かかったから、作業着にしていたのだという。毎年、その年の作業員と室堂前で記念写真を撮っているが、軍服姿は５年ほど続いた。

登山どころではない戦争が終わった昭和21年に立山に登った。その翌22年に白山に登り、白山振興会あらため、白山観光協会が出来たのが、23年という順序になる。そもそも「主任職」なるもの、地元白峰住人のあたりでもよさそうなものである。ところが、７、８月の２カ月だけの山暮らしを受ける者はなかなか見つからなかった。

木下さんは、営業写真屋の長男だった。写真屋には季節需要があり、秋から春は、冠婚葬祭、卒業・入学などで多忙ながら、夏は比較的暇になる。元々山好きだった木下青年は、夏には下界の営業は父任せとし、自分は登頂記念撮影の需要に応えるべく、室堂に滞在していたのだった。

当時カメラは大衆が持てる物ではなく、カメラは大型、写真乾板も重かった。白山で登頂記念の写真を撮るのは、営業写真家の仕事だった。室堂前で御前峰をバックに、あるいは、頂上で撮ってほしい…日に何度も登頂することがあったという。

丁度夏場に上がってくる青年…観光協会は、それならと白羽の矢を立てたのだ。

「あんた、山好きなそうやけど、山行って、ちょっこり写真も写したり、山の手伝いでもしてもろたりで、一月ほど山で生活してみんか」という話になって、

「ほんなら、いっぺん行ってみましょ。続くか続かんかは別として…」

と受けたのがきっかけだったそうだ。つまり、昭和23年より、まず白山観光協会写真班として室堂へ務めることになる。

「ほしたらもう縛られてしもて。当時主任しとった人が都合で辞めてしもて、あともう否応なしで」

「『わしゃ、そりゃ駄目や。二月も山に縛られたら、わしかて商売しとるがやし』

て言うたがやけど、

『みんなで応援すっさかい、やってみてくれ。どうしても駄目なら、それはまたそん時の話や』

言われて」

「当時、前田宮司やら、玉井敬泉さんやら、そんな人らに押さえつけられて。もう、ねじ伏せられたようなもんで（笑い）。それが25年続いてしもたがや」

前田宮司さんの「三十年のあゆみ」誌への祝辞の一部を掲載しておく。（掲載時は北海道神宮　宮司）

「私が白山比神社に宮司として御奉仕させて頂きましたのは、終戦間もない昭和23年の正月

のことでありますが、御奉仕20年間を省みますと悲喜こもごもの思い出があります。

山好きの私は、白山登拝を楽しみに赴任致しましたが、戦時中は登拝する人も少なく、四方の登山道は雑草や藪に覆われ、所々崖崩れがあって道形のない所が多くなって居りましたので、白峰・尾添の人達と共に登山道路を開くべく危険を犯して登山した思い出があります。又、昭和26年の白山奥宮境内3000歩の無償譲与に際しましては、大蔵省に御百度を踏みましたが、白山全山の実測図を添付するように命じられまして、これは到底不可能でことでありますから、参謀本部の地図に実測線を入れたものを複写して、恐る恐る提出しましたが、冷汗をかいたことも忘れられません。又、国立公園昇格問題では審査委員の方々が、夏の短い期間中に、しかもバラバラに調査に来られますので、其の都度、山麓の村長さん方と案内役・接待役をつとめました。そのせいもあって、私は在任20年の間に50回も白山全域を駈け廻らせて頂きました。その当時の松原村長・佐藤村長・永井喜市郎氏等の面影が目に見えるようです。

昭和36年８月の白山北美濃地震の際は、登拝者の安否を心配しましたが、前日の登山者はほとんど下山しており、当日の登山者はまだ山麓にいる２時半という時間帯でありましたので、犠牲者を最少限度にとどめることが出来たことは、不幸中の幸でした。白山三峰の頂上の御社殿は、地震のため全部倒壊しましたので、この復興に当って、御前峰の奥宮は、間組の寄進ということもあって、東京で一度組み立てたものを分解して、美濃側の山麓に運び、柱を１本づつ蒲団に包んでヘリコプターで山頂に運搬するなど苦心したもので、今考えて見ても、貴重な建造物であると思います。（後略）」

玉井敬泉画伯も本職の絵を描くのも忘れて、国立公園昇格運動に懸命に動かれた方だった。

それら白山を愛する方々に頼み込まれ、またまだ戦後をひきずる時代に２カ月だけの山暮らしの変則生活を受ける者など探せない事もわかり、また何より「白山なら」の思いもあって、「木下主任」は誕生した。昭和28年の写真は、主任になりたての木下さん。大正13年生まれだと、昭和の年号が丁度、年令と同じになる。28歳の若い若い「主任さん」である。

写真が本業の木下さんであれば当然かもしれないが、室堂での歴年の勤務員集合写真、また「白山会」（力丸さん主宰の会とは別）というその年の勤務員の解散式（遠方に帰る学生もいることから、夏山終了直後に開催されていた）の集合写真、どちらも大切に保存されている。

還暦の室堂会の時の スタイル。赤チョッキ。山シャツ、チロルハットは 主任時代の物。

その右端、左端、あるいは真ん中に、とても楽しそうな木下さんが写っている。

当然ながら木下さんは、少しづつ貫禄がついていく。回りは若く、華やかだ。勤務員は当時も、夏場だけの特殊性から学生が主体だった。

もう一種、「室堂会」の集合写真もたまっている。こちらは、かつての室堂勤務員の、木下さんを囲む同窓会。隔年に永井旅館で開催され、パンクしない程度の百名ほどが参加している。こちらはかつての年令差を保ったまま容貌が変化しているが、その真ん中に、これまた、幸せそうな木下さんがいる。

これが25年続いた理由なのであろう。若い人達の人生に、人生を重ね、また、それら学生が社会人になり家庭をもち、顔を出してくれたり知らせをくれたり…。二足草鞋を辞めなかった「主任職」の魅力であったのであろう。

「それが、昭和48年まで。そう、昭和48年11月23日…発病した日やさかい忘れんわね」

初冬の寒さをこらえ深夜まで仕事に精を出されていた木下さんは、脳梗塞の発作で倒れられた。48歳の働き盛りの時のことだった。

２カ月の入院の後、左半身不随から、かつての室堂診療班ゆかりの医師の親身のリハビリにより写真業には復帰。その間、主任職は保留されていたが、山はもう無理の結論を出し、弟の道雄さんに引継ぎをされたのが昭和51年。その道雄さんは昭和45年から、手伝いに室堂に上がっていた。

やはり、室堂管理は特殊な仕事だった。夏のアルバイトは確保出来ても、通しでの職員がな

かなか確保できなかった。

主任を受けた時には、夏山の２カ月のみが山上勤務だった。秋山については、団体登山の申し込みがあれば、先に入山し、釘打ちを外し、めった汁などを用意した場合があった。また、春山については、白山荘が開放されており、木炭や毛布が用意してあって、登山者が自主的に使用することになっていた。

それが国立公園になってからは登山者が増え、春山、秋山も常駐するようになる。春山となると、連休前４月下旬からの入山となる。木下さんも本来の仕事がある。そんなに長く山にいてくれる人は、なかなか探せなかった。

「他人にはどうしても無理が言えない。兄弟にも言えるというものではないが…。私は兄弟が多いんやけど、道雄ならとひっぱりこんだ。山知っとたってわけやなかったけど『ほんならやってみようか』言ってくれて。それがきっかけやったがやけど、あれも30年続くことになったね」

「観光協会はね。交替がおらんがです。神社ならね、職員は交替で10日から２週間交替で奥の宮勤務になって上がって来て、替わりに下りて行って。神主も巫女さんもそんながやけど。

アルバイトかてね、２月通しなんて人はなかなかつかめん、足踏みしとるような人はともかく（笑い）。そんな何日から何日までとかの編成を、全部私がやっとったがです」

「夏山始まってしもたら、いやおうなしに勤務員が要るんやから。その頃のあいてる人がなかなかつかめんで。あちこち頼んで歩いて」

「時間がある人でもね、山が好きな人でないとね」

夏だけの特殊性から、あたる先は大学など、学校関係だった。バイト料は、平地より割高に設定してあった。しかし、

「いくらか？」をまず聞いて来た学生はいなかったそうだ。「山へ行ってみようか」「白山なら」で、申し込んでくる学生ばかりだった。そのことも、木下さんには、嬉しい行脚だったようだ。

室堂にあっては、度々コンパも催し、楽しめるよう腐心されたという。もちろん、ご本人自身お好きだったようである。食事にも気を使い、勤務員用には変化あるメニューを厨房とも相談し、荷揚げを手配された。

勤務員は役割により、出動時間が違う。厨房を手伝う者、発電機をスタートさせる者、掃除に掛かる者、売店に立つ者、登山者を案内する者、また、別当出合へ郵便嚢を担いで下っていく者…細かいローテーションは、ベテラン勤務員が組み、かつ点検に歩いた。そういった分業をやれる所は任せたが総采配は主任であり、細かい賃金計算など、仕事は山のようにあった。

「山へ来てからでもね、途中で不満洩らす人やら。先輩連中から『これくらい担げんがか！』言われるとね。本人にすりゃ、初めてで、そんなこと言われてもね。それこそ５キロや６キロて重さでないしね」

「ヘリも、途中から使えるがにはなったけどね。ほんでも緊急に上げんなんもんとか…。ヘリは天候で飛べんがになるし、どうしても上げんならんもんとか、郵便物とかあるしね。勤務員は、別当出合と、ずっと往復もせんならんと決めて（注：ボッカ業務がかなりあったという意味）」

「それもね。私の時から始まって。その頃始まった例が、その後もずっと続いとるがです。先輩から後輩へと受け継がれてね」

ちなみに力丸さんが兵隊になられた時の初仕事は、「中飯場へ行って、フキ採って来い」だったという。

「とにかく山菜を使わんといかんという。山行ったら山のもん。あざみの天麩羅やたら、蕗たら。それにあわせて、椎茸やたら。椎茸なら荷揚げしても軽いし」

国定公園になった直後の頃であったが、その頃は全国の山小屋もそんなものだった。だいたいが、野菜が外国から空輸されてくる等考えられない頃。金沢旧市外にもまだまだ畑が多く、そこに生えていて、食べられるのなら、使わない方が不審がられる時代だった。

永井旅館にもなめこの塩漬けを頼み、一斗樽漬けしてあるそれを小分けにして運び上げた。小分けといっても、漏れない容器はやはり小樽であった。担ぎ辛く難渋したそうだ。

雪解け直後に顔を出すアマナ（大葉雪笹）もあくがなくおいしかったとのこと。

山菜利用といっても、室堂周辺は砂礫地である。客が登ってくる季節であって、豊富に採れる所…それが「中飯場への出動」であったらしい。長靴で１時間足らずで駈け下りる。蕗の束を担ぎあげ、その後は指を真っ黒にしての皮剥き…。それが、山菜採取など以ての外となり、全部の食材を荷揚げせねばならなくなった。もちろん登山客も増えて、量的にも現地調達では間に合わなくなった。

（→ P.120）

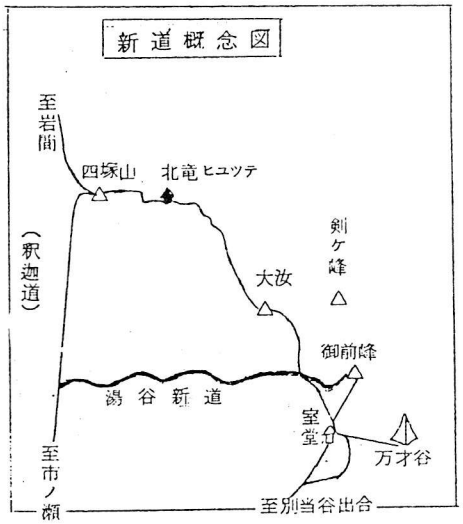
上から３分の１、右から５分の１あたり。お花畑コースの斜め右下に、右下へ延びている道痕が見える。これがかつてのワンゲル道（湯谷新道）その先に広がっているのが、千歳平。

国立公園昇格運動の際には、白山観光協会会長には国会議員が就き、副会長は白峰村村長、比咩神社宮司に県会議員も加え…の体勢の政治力で臨んだらしい。誰の次は誰がと、さすがにお詳しい。

国立公園になってからは、それまでの老朽化していた石室を、一つずつ壊しては立て替えしてもらえるようになった。

ランプやカーバイドの照明も、発電機からの電球に変わった。夏の最盛期には 500名であった宿泊客が、2000人にも増加していった。その一方で、大型冷蔵庫が設置され、ヘリでの大量輸送、大量備蓄も可能になった。

その頃の金大ワンゲルに関係深い事柄としては、昭和37年、ワンゲル新道が作られたのである。そのとっつきはわかりにくいけれど、高山は自然回復が遅いため、知っている人が見ればまだ、それと分かるという。私は「当然」分からず、とうに昔話と思っていたが、一枚の航空写真を見せていただいた。なんと、はっきりワンゲル道が写っている。もうみんなが忘れて昔話になっているのに…ハイ松は、切られてしまうと、かくも回復できないものなのだ。今はお花松原が脚光を浴びているが、千歳平（せんざいだいら）も、劣らぬ花園であった。室堂からも近く、木下さんもかつては、よく花見に行かれていたそうだ。



もちろん、当時もワンゲルはテント暮らしで、テントから作業現場への往復であった。中では、連絡のため度々室堂に立ち寄っていた稲葉さんを、主任さんは覚えているという。

当時県内には、砂防新道、観光新道、釈迦新道、白山旧道、岩間道、楽々新道、中宮道の７コースがあった。白峰へ降りてくるコースとして作られたのが青柳新道であり、その上部がワンゲル新道もしくは湯谷新道と呼ばれた。

このあたりはベルクハイム４号、稲葉正巳氏の記録が詳しく、再録しておく。

新しい道・白山湯谷新道開発

◇コースについて

夏期合宿の疲れも癒えない７月28日から８月10日まで、白峰村の依頼により、我々14名は、

室堂から主谷を経て釈迦岳に至る新道の開発を行なった。

◇いかにしてこの道は作られたか

コースの選定までも我々に一任されていたために、作業は予想以上に難行した。

確か６日目だったと思うが、真夜中にむっくりと起き上がり、“先発隊が消えたぞ！”とどなった人もあった位で、肉体的・精神的疲労は非常に激しいものであった。

二度台風に襲われはしたが、天気が余りにも良すぎたことも、疲労の大きな原因になったと云えるだろう。

その反面、新道と釈迦岳に到達した時の喜びは大きく、その夜テントの中で、“ハクサンコトブキ”と“エタ”で行なった乾杯の味は忘れられない。

しかし新道は何も我々だけの力で完成したのではなく、色々と助力して下さった室堂主任の木下さんや観光協会の出村さんの御好意も忘れてはならない。

作業は辛いことばかりあった訳でもなく、色々面白いエピソードもあったのであるが、それは別の機会に述べることにして以下簡単に新道の紹介を行いたいと思う。

◇時間的にはどうか

先に述べたように、此の新道は室堂から直接釈迦岳に至る全長４㎞の道である。従って、大汝・四塚を通ることなく釈迦岳に行けるから、時間的にも距離的にも非常に短縮される訳である。

◇室堂から千歳平へ

室堂から夕日岳を経て、約20分で千歳平に出る。しかし、千蛇ケ池にその源を発する沢を下り、途中で新道と合流し千歳平に出ることも出来る。

ここはそのほぼ中央を流れる沢をはさんだ緩傾斜の台地で、草原と、トガ・ハイマツが巧みに配合された美しい高原である。草原は雪渓から流れ出る水と、点在する数個の池に潤されたお花畑である。特に７月の中旬乃至は下旬の頃、ここを訪れる人は、白山の象徴黒百合、可憐な白山小桜、チングルマや、緑の絨毯を敷いた様にぎっしり生えているイワイチョウ等の群落に目を見張ることであろう。作業中、草花の少ない所をさがすのに苦労した位、豊富なお花畑である。とにかくここのお花畑は白山随一であろう。

◇千歳平から市ノ瀬へ

千歳平を過ぎると主谷への下りである。トガやダケカンバの生えている急斜面を下ると主谷へ出る。この谷は余程の雨が降るらない限り、足を濡らさずに渡れる。

主谷からジグザグの道を登りつめると釈迦新道と合流する。室堂から市ノ瀬までは約４時間の行程である。

次の昭和38年には８期柳川徹氏の記録（ＢＨ５号）を見ると12日間、シゲジ～鳴谷峠間を作業している。ＢＨ11号では「通行不能」を「通行可能」にしており、ＢＨ15号で再度バイトの要請が来ている…部内記録はそれだけである。観光協会の30周年記念誌には昭和37年着工だけが載っている、いわば幻の道だ。

村田先輩は、このバイトに37年、38年に参加しているという。この土方仕事はたいそうきつく、炊く飯の量も並みではなかった。肉体労働に明け暮れる諸氏は、次第に本能が剥出しになってくる感があって、恐怖を覚えたともいう。そんな真夏の高山帯バイトは連日のように雷に見舞われた。

主任さんも雷は恐ろしかったという。避雷針があって、室堂に落ちることはないものの、窓ガラスの向こうを真横に稲光が走り巡り、さながら天地創造の光景が繰り広げられた。

頂上の方位盤には幾条の雷の跡が見られるし、頂上奥宮が被雷消失（第一発見者は29期深井氏）していたこともあった。

昭和37年は白山国立公園制定の年だ。この気運に乗じて、白峰村は、自村へ下りてくる新道が欲しかったのであろう。

木下さんもその当時は、岩間道よりもっと利用客があるのではと思ったという。しかし登山客の方は、どうせやや長めを歩くのであれば、白山を縦断し、温泉があり、バスの便（当時は北鉄の岩間温泉行きが山崎旅館まで入っていた）もあるルートの方を好んだ。結果、この道はワンゲル部員の懐を潤すのみで廃道になった。

青柳新道はその後、春山合宿として昭和57年春まではワンゲルで利用された。

室堂暮らしが長かった木下さんは、室堂から上になると、踏む石も決まってくる程だった。それほど慣れ親しんでいても、ホワイトアウトになってしまえばわからない。常連客が、実は御前荘のすぐそばで穴を掘ってしのいでいたなど、笑い話ですんでよかったことはいくらもある。客が少なくなってから補修仕事にかかってもらうが、その大工が下山のおり、弥陀ケ原が白一色になどなってしまうと、木下さんは随分心配されたそうだ。

たかがの所で方向感覚を失う…それが高山で

あれば遭難になってしまう。そんな不幸な事例にいくつも関わってこられた。

中でも印象深かったのは、昭和41年の小松の中学生の行方不明。「しょんべんに。後で追い付くから」
と友人を先行させた清水昭博君は、それきり消えたのだ。場所は十二曲がりと、水平道と、エコーラインの３本の登山道に囲まれた三角地帯。どこへ行っても登山道には出られるのに。先生方はもちろんのこと、多くの山岳団体も加わり、一週間探し続けた。ローラー作戦もして、隈無く三角地帯を調べた。今も見つかってはいない。

集団捜索の後も学校の先生は上がってきていた。一人で探している光景が長く見られたそうだ。三角地帯をあれだけ探したからには…おそらく一旦は登山道に出て、早く友人に追い付こうと近道のつもりで、登山道を外れた…それで見つからないのではと思うとのこと。

遭難については、鶴来警察署の所管であり、そちらを調べれば、記念誌に掲載されていないものもわかるという。

観光協会の三十周年記念誌、五十周年記念誌は、木下さんが編集され、写真も選定された。四十周年誌は、神社の方で、追加分を主に文章でまとめておくということだったので、タッチしていないそうだ。

室堂は2002年改築され、また新しい歴史が始まる。主任を辞められてから、木下さんは二度ヘリに乗って室堂を訪ねる機会があったそうだ。そして、五十周年誌をまとめられた際、かなりの資料を整理されたという。

今年は室堂会の開催される年にあたる。壮々たる役職に就いていた元兵隊達も徐々にリタイアし始めている。室堂会に、また集え、ご縁を楽しめる。　　お名前とおりの幸せを手にしておられる木下さんだった。

以降は白山観光協会発行「三十年のあゆみ」からの転載です。
コピーを重ねる度、画質が落ちますので、ページもそのままとします。

なお、25ページの写真が木下さん撮影のもので、記念切手に採用されています。

玉井敬泉画伯筆　白山案内絵図　（昭和２年）

白山開山の歴史と「白山観光協会」設立の経緯

古来、白山は「越のしらね」「加賀のはくさん」などと呼ばれて衆人に親しまれ、万葉を初めとして多くの詩歌にも詠まれ、駿河の富士・越中の立山と並んで「日本三名山」の一つに数えられているが、その信仰の歴史は、5,000年前からか或いは10,000年前からか、私達の祖先が、私達の郷土に生を承けた時から始まるはずである。

そして、今に白山の崇高さに変りはなく、祖先から受け継いで来た尊崇の想いをそのままに、霊山としての白山を汚すまい、幾千年の後世に伝えようと努めているが、この尊崇の想いは遠い昔の人達といえども…その時代の敬虔な人達だからこそ一層……浄い山頂に立ち、直接神々の座にひざまづいて霊気に触れたいと希う気持となり、約1,200年昔の養老元年、(或は三年とも云う)越前の僧（或は帰化僧とも加賀の僧とも伝う)泰澄によって人類初の登頂がなされた、と伝えられて今日に到っているが、この事はあくまで信仰そのものの行動であり、そのような観念に基ずく行動は「登拝」と云う敬虔な呼び方で言い継がれて1,000年以上も続き、信仰登山時代を具現した。

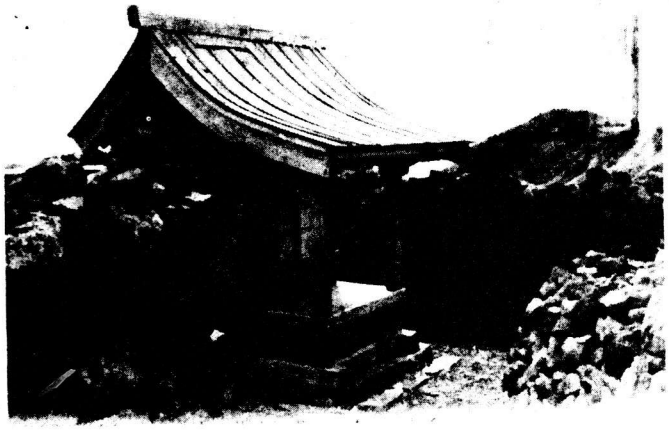
そして江戸末期、蘭学・漢学医などによる学術的な立場からの調査登山が併せ行われるようになって、急激に近代登山思想による登山に移行し、更に明治末期から大正年代に入って、海外からの影響も加わってか、「征服登山」とでも云うべき冒険的観念も加わった登山時代を経て今日に到っている。

以上のような最近の状況を背景に大正10年9月、限られた1,000人程度の夏山登山人口ではあるが、敬虔な若者を主とする登拝者へのサービスを主な目的とする事業を行うための団体が「白山振興会」の名称で結成され（13年6月内容充実のため改組）昭和6年国立公園法が制定され、全国各地に国立公園・国定公園・都道府県が指定する自然公園が次々と充実整備されるにつれて、先づ国定公園指定を目標に、その運動を強力に進めるべく、23年3月、十余年にわたった「白山振興会」を解消して「白山観光協会が発足した次第で，今年春満30年の月日を経過した事になる。

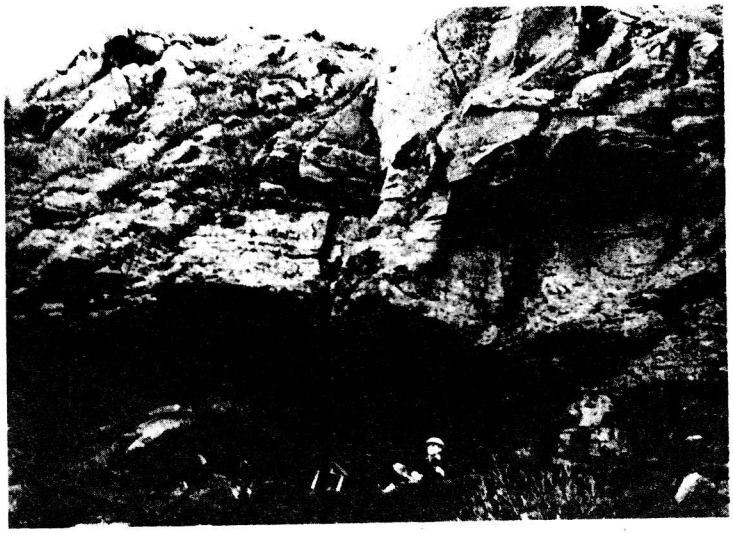
以上のように協会発足以来の30年を振り返ってみる時、それは白山開発の歴史の内の僅かに一部でしかなく、古い昔からの、先人の信仰心に基づく、ひたすらな「登拝」時代から現代に到る永い変遷の歴史の、最新の一コマに過ぎない。

従って「30年の歴史・事蹟」だけを記述して語ることは無意味に近い事で、そのような観点から、振興会時代、或はそれ以前の事蹟をもさぐって、永い歴史の中での30年間で、どのように白山の利用面が移り、且つ変ったか、又変りつつあるかをうかがい知るための参考とし、今後どのように利用すべきか、如何にして誇るべき遺産を後世に伝えるべきかを考え、且つは検討するための指針としたいと希う次第である。

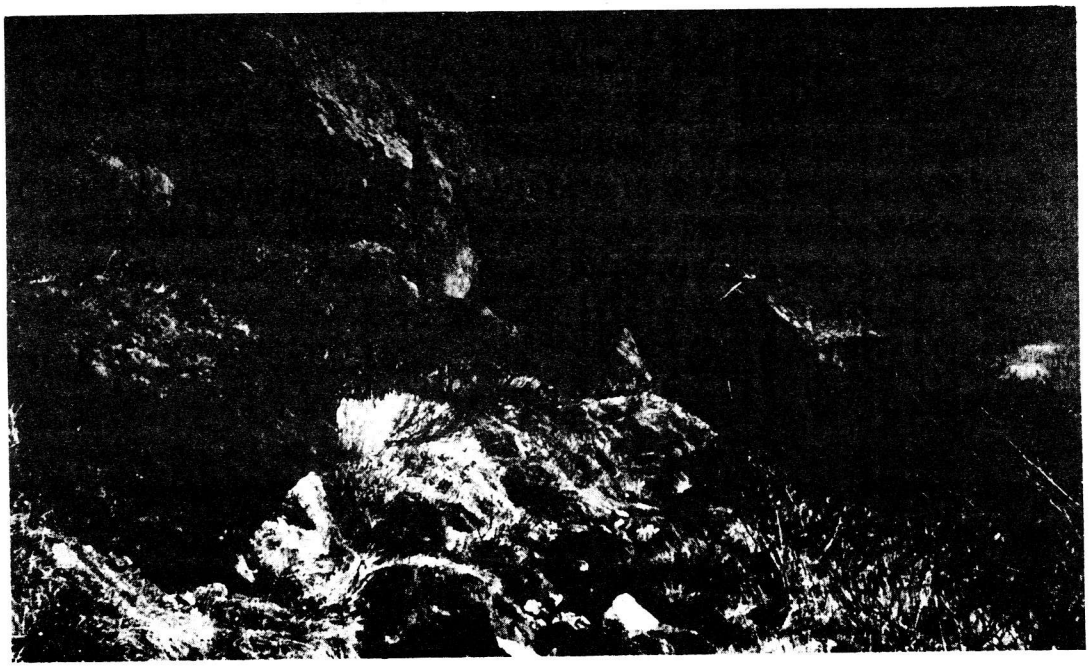
改築前の奥宮社殿　（昭和36年９月）



大汝神社社殿　（昭和27年８月）
（昭和29年９月26日の台風15号により倒壊）



白山開山の祖、泰澄大師が３年間こもって十一面観世音菩薩を念じたと伝えられる「転法輪の窟」（御前峰東斜面直下にある）



昭和36年８月19日14時34分頃発生した北美濃地震により
欠落する以前の黒ボコ岩　（昭和35年８月）

白山室堂の推移

泰澄大師白山開山以後、仏教思想の浸透につれ遂年登拝者が激増した事は想像に難くない所で、初めの頃は辛うじて雨露を凌ぎ得る程度の雨具を携帯してブッシュをかき分け、又は伐り開いて進み、岩角を枕として、又木の根を枕として眠り、明くれば又難行を続ける、と云った必死の登拝行であったにちがいないし、その内に伐り払った雑木や、笹や枝などで立木を便って屋根形を作って、そこを「休み場」として常用した事であろうが、それ等の内の一番利用度の高い場所を選んで、少くとも可成り永い期間の利用に堪え得る所に、もう一歩進んだ規模の「小屋」と云い得る程度のものを造りあげ、登拝者が増えるに従って、其処に粗末ながらも、更に一歩進んだ建物を造り「室堂」と呼ぶようになった、と推測される。

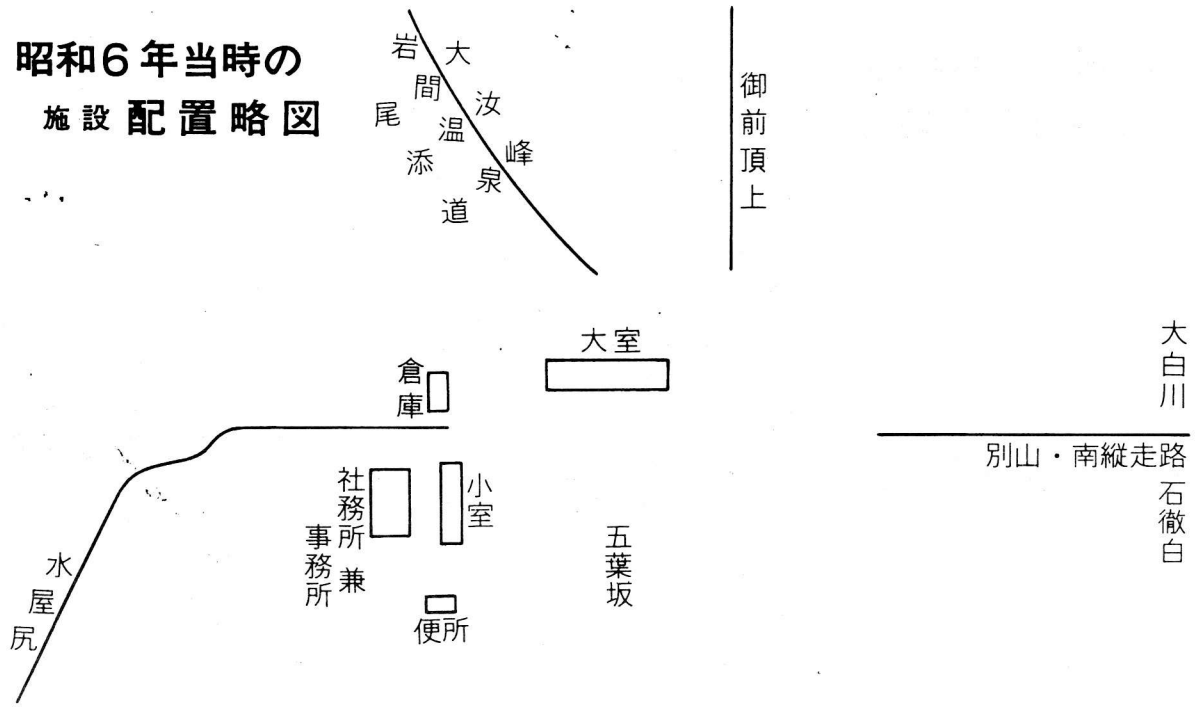
そして初めて「室堂」の名称が見られるのは長久三年(1042年)……「白山記」……のようだから（開山以来約300年余）開山から100年及至は200年経って「室堂」と呼べる程度・規模の建物が出現し、「越前室」はほぼ現在の位置に、「加賀室」は大汝峯から御手水鉢を過ぎて右側の道沿いにあったようで、何れも水の便が良く（今もその事に変りはない）……昭和24.9.1「白山比咩神社社報「白山さん」9月号、玉井敬泉画伯稿……それから江戸時代に入って、「越前室」がほぼ現在位置に、「加賀室」は加賀禅定道（旧尾添道）の馬の背越の天池の横に、別山御手洗池の所に「別山室」、南龍ヶ馬場山姥谷の一角に「美濃室」千蛇ヶ池のほとりに「六道室」更に越前禅定道の慶松平には「慶松室」別山天池わきに「六兵ヱ室」今清水の大杉の所に「今冷水室」とそれぞれの禅定道沿いに「中継室」（中間室）があった（その証左として今に建物跡が見られる）……前承「白山さん」9月号……。

明治末年の頃には既に間口7間、奥行2.5間の室堂が、ほぼ現在位置に1棟あり（約17坪・58m²）……収容力40～50人程度で板葺屋根の上には多くの石を乗せて台風などの被害から守るように工風してある。

大正10、11年には県の継続事業(3,000円)として以前迄の木造を腰下石積に改めて「大室」「小室」が新築され（大正10年には白山振興会設立）昭和7年には矢作水力電気会社が「婦人室」（後に黒百合荘と改称）を造り、昭和12年には食堂を新築するなどの事があり、利用者の増加と共に約15年間受入れ態様の充実と整備に努めたが、時代の推移と利用者の急増に伴い、昭和23年「財団法人白山観光協会」発足を機会に、同年には「雷鳥荘」が出来、更に24年「御前荘」と年を逐って古い宿舎の改造・改築を重ねて収容力の増加と内容充実に努めたが、全国各地の山岳公園の魅力が登山人口の増加を促したものか、それとも荒されていない白山の良さが認められたものか、将又37年に国立公園に昇格したことが大きく影響したものか、30年頃からの登山者急増が目覚ましいためもあって、38年からは次々と軽量鉄骨造りの宿舎を新築して、35年には10,000人を超え39年には15,000人を突破すると云う状態に対応してきたが一方38年からは自然公園の整備方針に基き、之迄の建築物・施設は全て取り壊して前記の方針に則った施設（雷鳥荘・御前荘の跡に室堂センターなど）が次々と新築され今日の全体施設が出来上った経緯の下に昭和52年には24,646人(南龍ヶ馬場の利用者を加えると28,407人)を数えるに到っている。

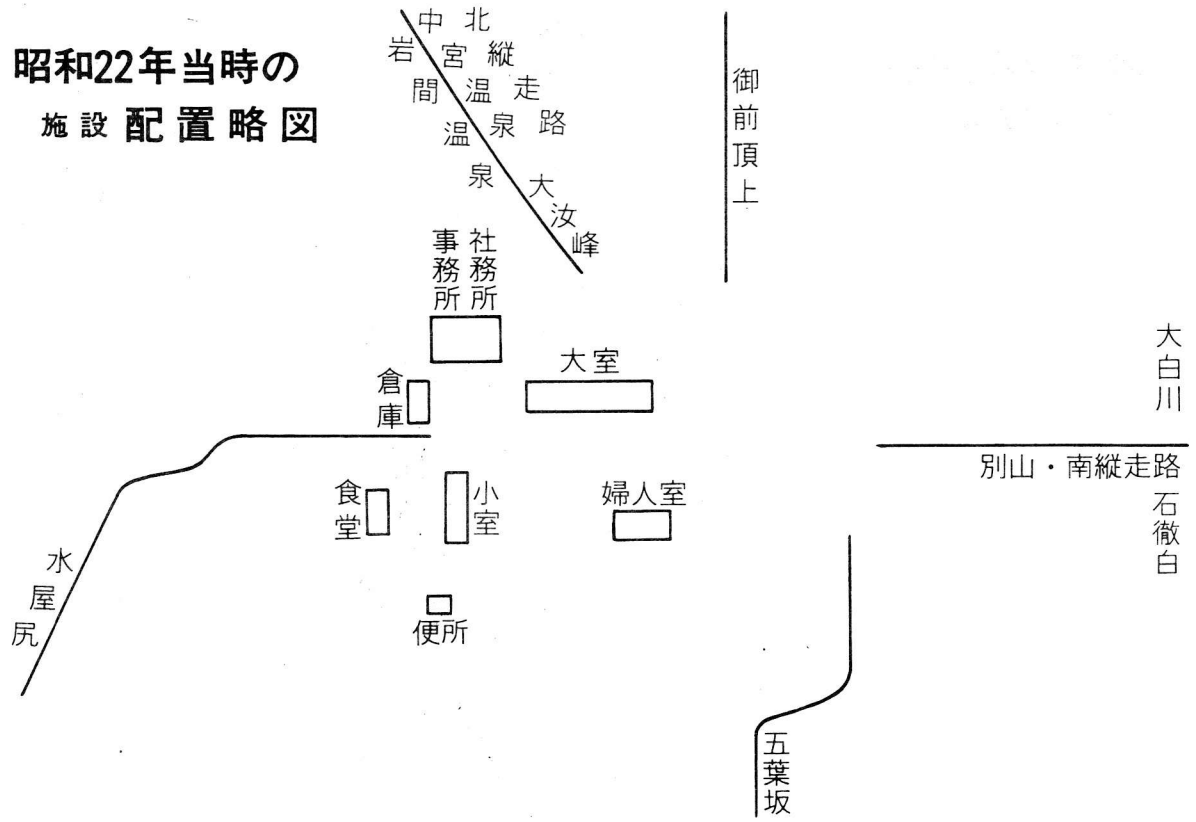
……但しこの数字は凡て宿泊者名簿・利用者名簿に登録された人数だけである……

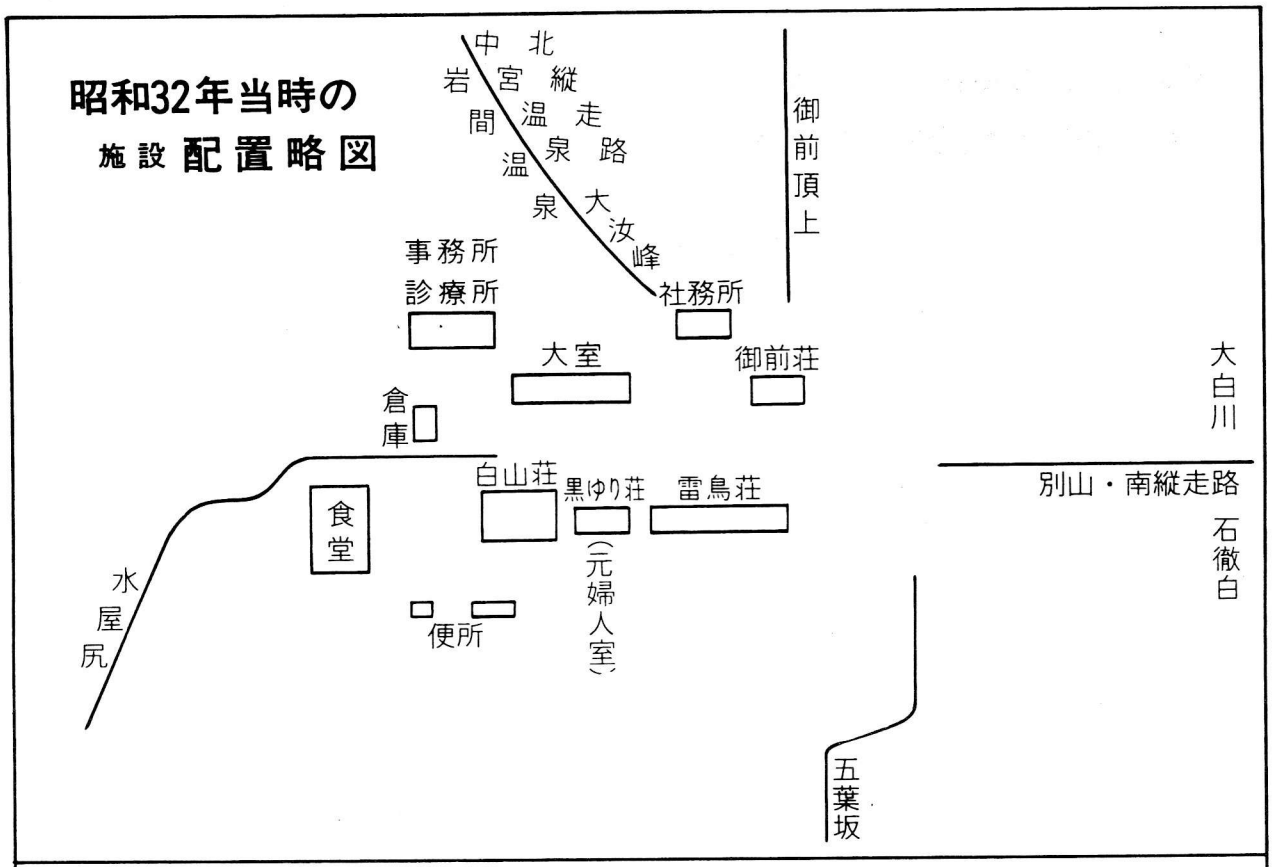
昭和6年当時の施設配置略図

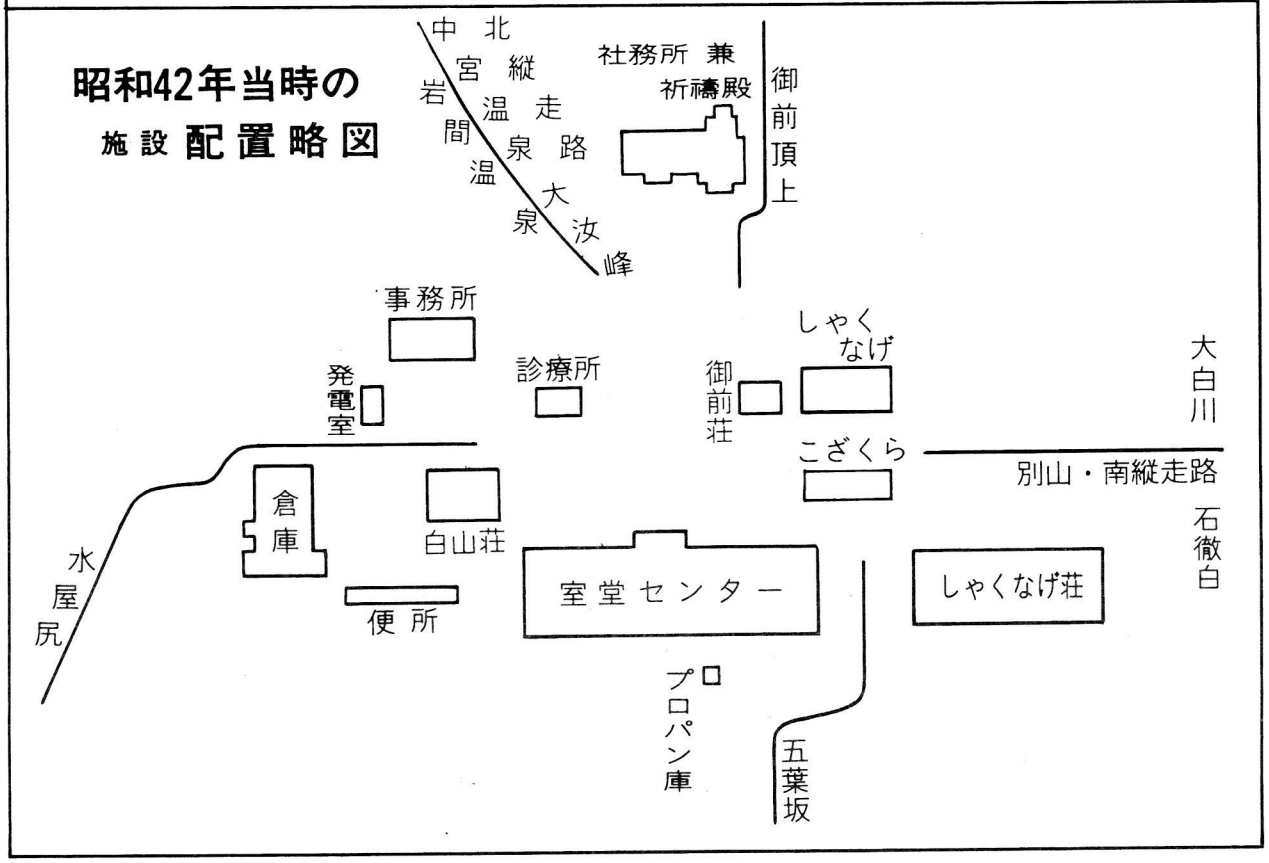


室堂施設の変遷

昭和22年当時の施設配置略図




昭和32年当時の
施設配置略図
中北縦走路
岩宮
間温泉
温泉大汝峰
御前頂上
事務所
診療所
社務所
大室
御前荘
倉庫
大白川
白山荘
黒ゆり荘
雷鳥荘
別山・南縦走路
食堂
(元婦人室)
石徹白
水屋尻
便所
五葉坂


昭和42年当時の
施設配置略図
中北縦走路
岩宮
間温泉
温泉大汝峰
社務所 兼
祈禱殿
御前頂上
事務所
しゃくなげ
発電室
診療所
御前荘
大白川
こざくら
別山・南縦走路
倉庫
白山荘
石徹白
水屋尻
室堂センター
しゃくなげ荘
便所
プロパン庫
五葉坂

昭和52年の
施設配置略図

貯水タンク

御前頂上

北縦走路

中宮温泉

岩間温泉

大汝峰

社務所 兼 祈禱殿

貯水池

発電室

ポンプ庫

白山荘

倉庫

貯水タンク

便所

水屋尻

室堂センター

倉庫

プロパン庫

五葉坂

御前荘

大白川

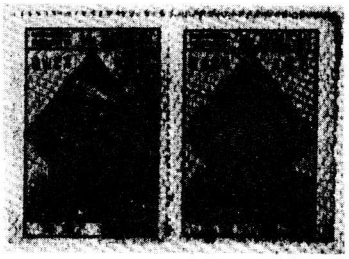
別山・南縦走路

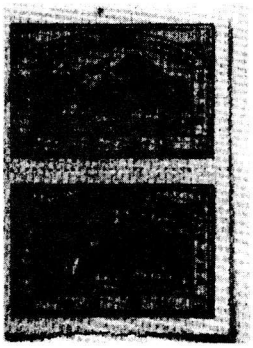
石徹白

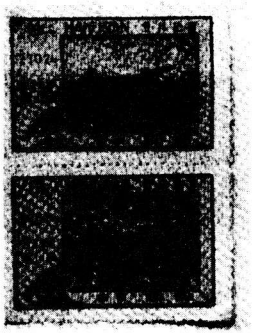
しゃくなげ荘

くろゆり荘

昭和初期の
登山記念シール







翠ヶ池の全景

白山国立公園記念郵便切手発行記念

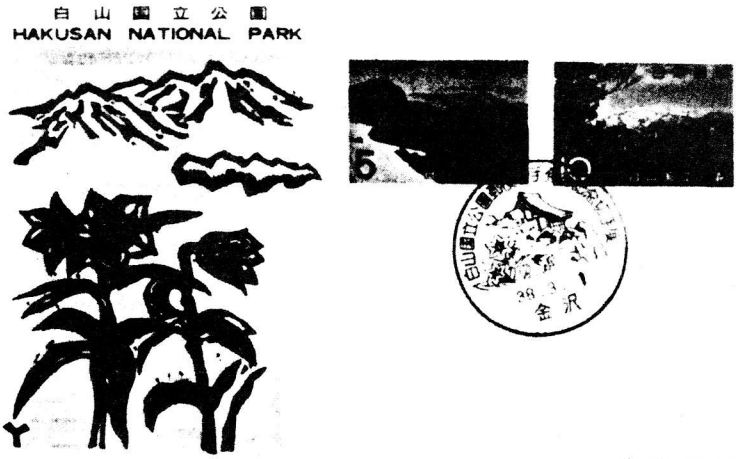
白山は昭和30年７月１日、面積47,289haを区域として国定公園に指定され、37年11月12日には国立公園に指定された。これに伴い凡ゆる面に於いて施設の整備拡充がなされて今日に到っている。

白山国立公園郵便切手

白山国立公園は石川、福井、富山および岐阜の４県下に跨り、御前峰（2,702メートル）を主峰として、大汝峰、剣ヶ峰、別当岳等の高峰を含む山岳自然公園で、面積は47,402ヘクタールで、昭和30年７月１日、国定公園に指定されたが、昭和37年11月12日に国立公園に昇格した。

第２次国立公園切手シリーズの第４集として白山国立公園の風景を描く５円および10円の郵便切手を発行し、全国各郵便局で売りさばく。なお、東京中央郵便局切手普及課では通信売さばきを行なう。

発行日	昭和38年３月１日
種類	５円および10円郵便切手各１種
意匠	５円　白山翠ヶ池
	10円　白峰村から望む白山連峰
刷色	５円　茶黒
	10円　暗い青緑
用紙	白紙、無燐
原式	グラビア
印面寸法	縦 22.5ミリ、横 33ミリ
シート構成	縦４枚、横５枚の20面
原写真撮影者	５円　木下幸雄
	10円　津村記一郎
発行枚数	各 10,000,000枚



北陸郵趣連盟

夏山開山準備 強力(ごうりき)による荷揚げ（昭和30年6月29日）

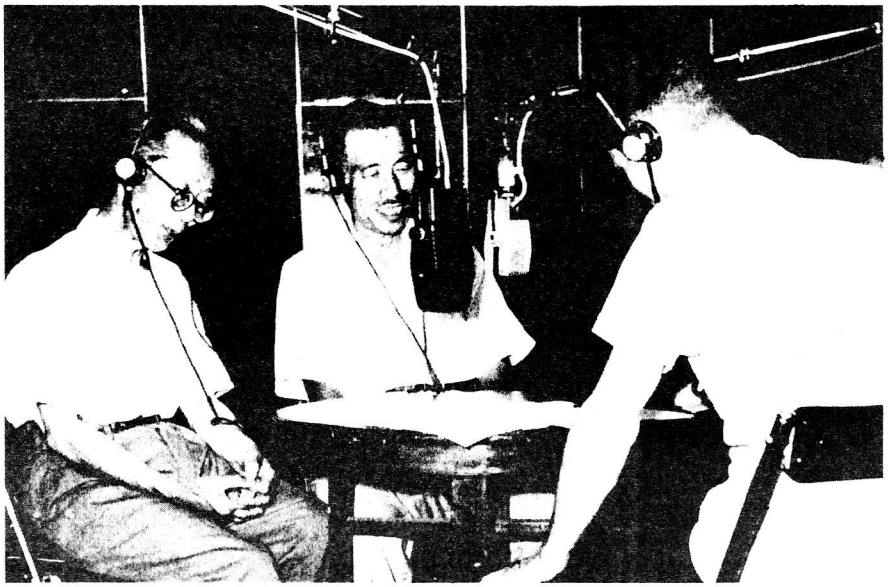
荷揚げ風景

食糧の補給荷揚げ（昭和31年8月）

ヘリコプターによる
夏山用物資輸送
（昭和51年8月）

白　山

無線電話
開局記念
三元放送



MROスタジオ
左より
故玉井敬泉画伯
故細川元孝氏

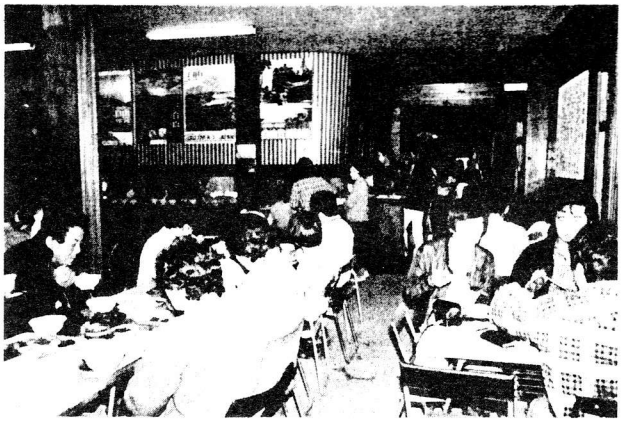
立　山

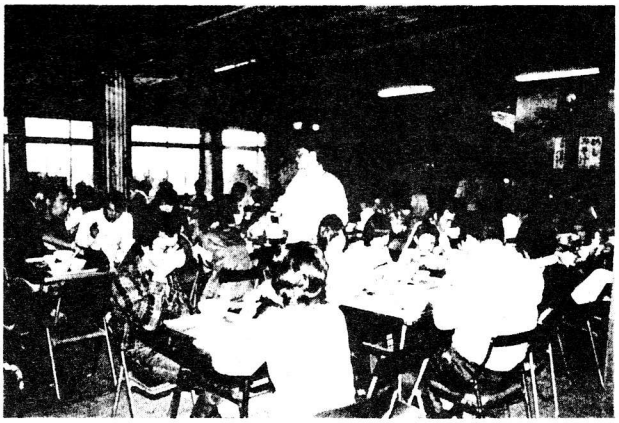
モシモシお父さん、今元気で着きました

受付売店風景

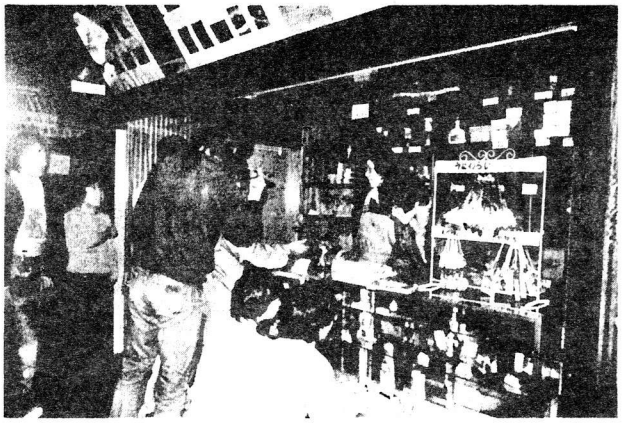
白山室堂生活
夏のスナップ

食堂はセルフサービスです。
今日のメニューはなんでしょう？

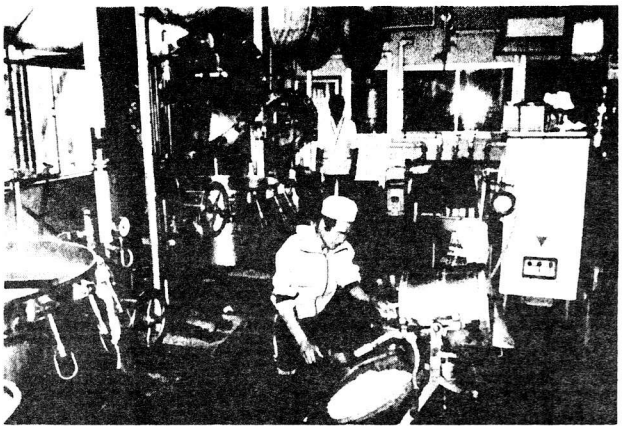


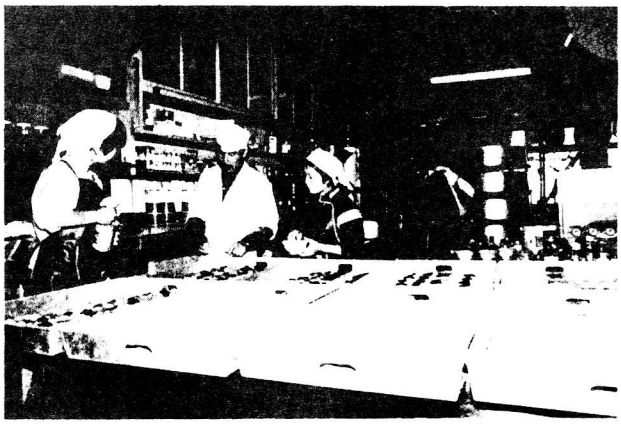


食堂風景（なめこのみそ汁のうまいこと）



食堂でコンパのあと記念撮影（昭和33年 8 月）

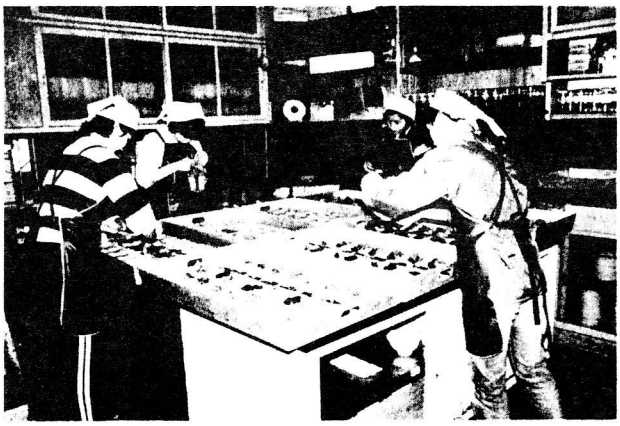




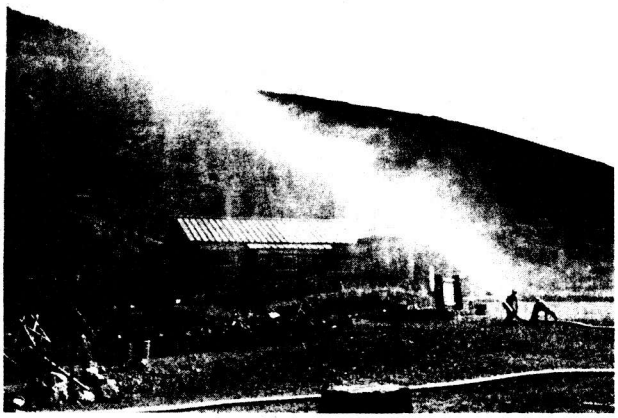
白山室堂生活
夏のスナップ

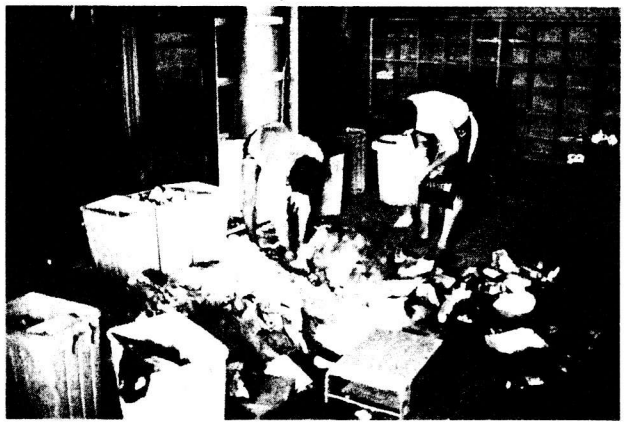
室堂調理場の今昔

右　二十年前の調理場風景
なつかしい顔、顔、顔……



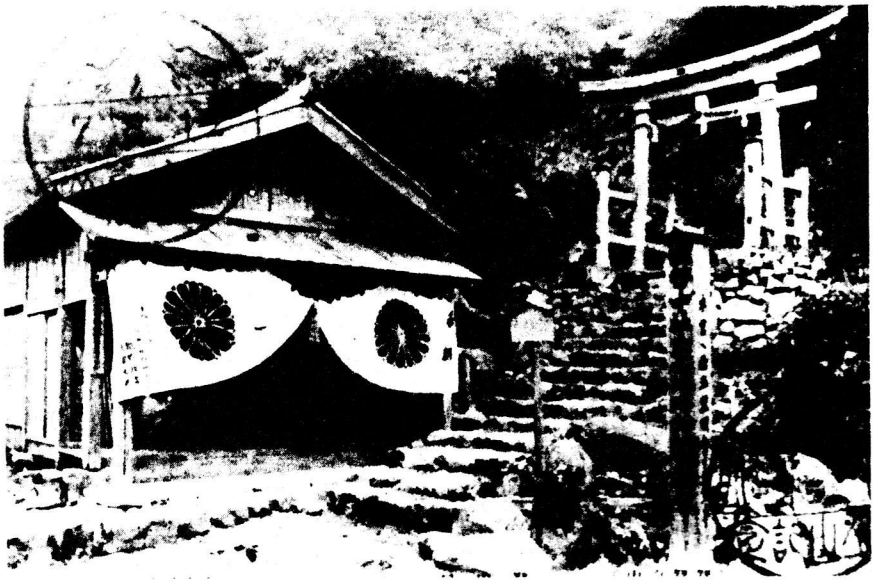
左　現在の近代的に完備された調理場で
シーズンピークには一度に二千人近く
の食事を作る日もある。





各室のゴミ処理、カンつぶし、毛布干しは、室堂の兵隊（アルバイト学生）達の重要な役割である。ゴミはすべて焼却、プレスされた空カンは翌春ヘリでおろされる。
飲料水や雑用水の確保も大変である。水の豊富な時期には消火放水訓練も行なわれる。

旧 白山温泉



旧白山温泉
（越前禅定道）
登山口

旧白山温泉全景

昭和9年7月11日の手取川洪水により流失する迄は専らこの温泉を登山基地として利用した。又この頃から砂防工事用の資材運搬路も利用するようになった。

昭和7年のパンフレットから

温泉旅館（市ノ瀬11・尾添11・飛騨11）

宿　　泊……1円50銭～3円00銭
強力組合……日　帰　り……3円
　　夜　掛　け……4円
　　泊　り　山……5円
　　平瀬及尾添……10円
冬　　期……2割増
スキー……5割増

今日こそは音にきく名もことわりと
　見て白山の夏の白雪
　　本　居　宣　長

昭和10年の室堂の物価

室堂使用料	45銭	白扇（男持）	15銭
定食料	60銭	白扇（女持）	10銭
弁当料	35銭	白扇（平骨）	20銭
毛布貸与料（2枚つつき）	40銭	雷鳥扇子（御製入）	20銭
木炭（1貫）	70銭	絵ハガキ	20銭
スタンプ	2銭	絵ハガキ（高山植物）	15銭
焼印	5銭	桑盃	20銭
白山地図	3銭	和酒（2合入）	50銭
白山絵図	20銭	ビール	60銭
雷鳥ハンカチ	8銭	サイダー	25銭
雷鳥手拭	12銭	金剛杖	15銭
雷鳥タオル	15銭	草鞋	5銭

◎室当使用料、定食料は団体（15人以上）は各5銭引

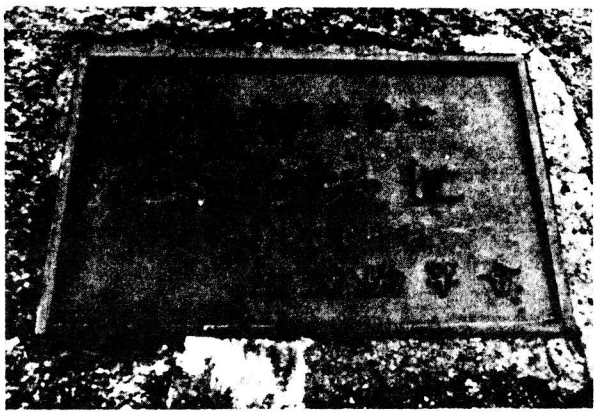
白山年譜

年　代	西紀	記　事
白鳳11.6.11	682	白山開山の祖、泰澄大師、越前の国麻生津(現福井市)で生れる…… 景雲元年(767年)3月18日86才で入寂したと云う…… 一説に加賀の人とも、又帰化僧とも云う
慶雲3	706	越前に山災あり、白山の噴火か
養老1.6.18	717	僧泰澄白山に登ると伝う、以来この日を「開山記念日」として諸種の行事が行われている
真観1	859	白山に異変あり
長久3	1042	白山噴火、「翠ヶ池」が出来た
安元2	1076	京都・藤原兼定著「玉葉」に「白川郷」の名が載せられている
康和1	1099	強震あり
寿永2.5	1183	木曽義仲、平氏追討を白山に祈願
正治2	1200	この年、後鳥羽院の「白山の松の木かげにかくろひて…」の御詠があり、白山のライチョウが広く世に知られる
文歴1	1234	強震あり、余震続く
建長4	1252	洪水のため本宮流失
天文10.8.11	1541	大風のため大汝峰頂上の神殿倒壊
23.4.1	1554	翠ヶ池から噴火、翌弘治2年迄続く（黒ボコ岩はこの噴火による遺物と推定される）
天正7.8	1579	白山噴火
13.11.29	1585	夜大地震あり、白川郷「帰雲城」埋没、内ヶ島氏一族城下300軒と共に滅亡
慶長4	1599	白山鳴動
正保2	1645	同　降灰あり
寛文7	1667	この年以来明治の廃藩までの約200年にわたり「お縮(おしぼり)小屋」「平小屋」と称する流刑小屋が、加賀藩によって五箇山の各地に設置され罪人を隔離す、その数約200人(赦免・病死・刎首・縊死・獄門・移送等あり)
天明5.6	1785	金子鶴邸、白山に登る
文化2.4	1805	この年没した橘南渓著「名山論」に富士山・立山・白山の三名山の名が見られる
文政12	1829	岩間の「噴泉塔」金子鶴邸によって発見発表
明治1	1868	神仏分離令布告
7.7.11	1874	ドイツ人ライン(J. J. Rein)博士によってジュラ紀の化石を含むジュラ層を白峰村・桑島地内で発見、この研究結果が1877年世界に発表されてから、わが国各地のジュラ紀層研究の手がかりとなる
明治末期	1830頃	ほゞ現在位置に間口7間・奥行2.5間の室堂1棟があった
大正8.8.25	1919	東久邇宮稔彦王殿下登山さる
大正10.9	1921	寛政の頃(1810年頃)からの木造室堂を石積室堂に改造した。「白山振興会」設立
10 11	1921 1922	大室・小室が県により増築された
13.6	1927	「白山振興会」組織替
昭和7	1932	矢作水力電気会社により「婦人室」が建築された
9.7.11	1934	「手取川洪水」家屋倒壊流失535棟、死者行方不明110人、耕地埋没流失2,550ha
12.7	1937	御前峰頂上に方位盤設置（矢作水力電気会社奉納）
23.3	1948	「白山振興会」を解消し「白山観光協会」を設立
23.7.18	1948	「雷鳥荘」新築
24.9.3	1949	午后5:00過ぎジェーン台風のため「雷鳥荘」の屋根破壊
25.9	1950	東大・小林真一教授、牛首川・湯ノ谷右岸に於て珪化木発見(昭和32.7.10「天然記念物」に指定)
26.9	1951	尾添川上流・中ノ川左岸に熱泉を噴出する石灰華塔群を学界に発表
27.6.11	1952	五箇山の「麦屋節踊」を無形

年　代	西紀	記　事
		文化財に指定
昭和28.7	1953	山頂で無料診療所開設
29.9.26	1954	台風15号のため大汝神社社殿倒壊
29.12.25	1954	「岩間の噴泉塔群」を天然記念物に指定
30.2	1955	ライチョーを特別天然記念物(地域を定めず)に指定
30.7.1	1955	白山「国定公園」に指定(47,289ha)
30.7.9	1955	山頂夏期臨時郵便局に無線通信開始
30.9.27	1955	大汝神社再建(総工費25万円)
31.8.4	1956	日本山岳協会長・塚本閤治氏、天然色映画「白山」撮影のため来県
31.9	1956	白山荘竣工
32.6.19	1957	「岩間の噴泉塔群」を特別天然記念物に指定
32.7.2	1957	白鳥町の「今清水の大杉」を特別天然記念物に指定
32.7.10	1957	手取川流域の「珪化木産地」を天然記念物に指定
32.7.11	1957	山頂に方位盤取付(奉納・細川元孝氏夫妻、運搬人・長崎幸雄氏)……落雷等のため破損著しいことにより再度製作したもの
32.10.29	1957	室平に「白山荘」竣工
33.5.14	1958	平村の「白山宮」「村上家」「羽馬家」上平村の「岩瀬家」を重要文化財に指定
33.11.10	1958	「別当出合休憩舎」完成(雪害のため破損、48.9.30再建)「岩間ヒュッテ」竣工
33.12.14	1958	白川村の「白水の滝」を天然記念物に指定
34.7.24	1959	白鳥町の「中居神社の杉林」を県・天然美術保存林に指定
34.9.22	1959	「甚之助避難小屋」新築(旧)45.9.30移転・再建
34.10.30	1959	「清浄ヶ原ヒュッテ」完成(雪害のため倒壊)
35.5.27	1960	白峰村の「かんこ踊り」尾口村の「でくまわし」石川県無形文化財に指定
昭和35.7.2	1960	協会事務局長・細川元孝氏、開山祭の帰途、六万橋にて転落死(64才)
36.4.1	1961	手取・中宮・岩間地区の温泉を「白山温泉郷」として厚生省国民保養温泉地に指定
36.8.19	1961	14時34分頃、別山三ノ峰附近を震源地とする「北美濃地震」発生、死者4・負傷者7・登山者122名一時孤立、別山神社倒壊、黒ボコ岩の上部裂落
37.8.10	1962	室堂にヂーゼル発電施設完成
37.10.19	1962	白川村の民謡「こだいじん」無形文化財に指定
37.11.12	1962	白山「国立公園」に指定(47,289ha)
38.7.1	1963	白峰村・桑島「小倉家」重要文化財に指定
38.7	1963	室平に「軽量鉄骨宿舎」2棟竣功(ヘリ輸送)
38.7	1963	「清浄ヶ原ヒュッテ」竣工(雪害のため倒壊)
38.8.30	1963	故玉井敬泉画伯胸像〔ブロンズ〕竣工・黒ボコ岩に取付奉告祭(35.9.30没)
38.9.3	1963	奥宮社殿改築・竣工
38.10	1963	「ゴマ平避難小屋」「殿ヶ池休憩舎」竣功
39.8.13	1964	祈禱殿兼社務所改築工事竣工
39.10.24	1964	「小桜平休憩舎」竣工(雪害のため倒壊、46.9.30再建)
39.11.12	1964	「南龍ヶ馬場休憩所」竣工
40.5.1	1965	本年度から春山開き
40.8.8	1965	「三方岩岳避難小屋」新設(同年冬雪害のため倒壊、41.8再建)
40.10	1965	「室平園地」開設
41.6.4-7	1966	白山を会場として全日本登山大会開催
41.9.23	1966	平村の「相ノ倉集落」国指定史跡となる
42.7.25	1967	室平に「くろゆり荘」竣工(鉄骨平屋建311m²)
42.7.30	1967	南龍ヶ馬場に「セントラルロッジ」竣工

年　代	西紀	記　事
		（鉄骨２階建190.26m²）
昭和42.7.30	1967	室平に「室堂センター」竣工（鉄筋コンクリート２階建320m²）
43.5.6	1968	荻町の明善寺鐘楼門「重要有形文化財」に選定
43.9.29	1968	室平に「こざくら荘」竣工（鉄骨平屋建311m²）
44.2.18	1969	白峰村・林西寺所蔵「十一面観音菩薩立像」県重要文化財に指定
44.9.30	1969	室平に「御前荘」竣工（鉄骨平屋建311m²）
44.10.31	1969	「チブリ尾根避難小屋」竣工
45.12.4	1970	上平村の「菅沼合掌集落」国指定史跡となる
45.12.9	1970	白川村の「どぶろく祭り」重要無形文化財に指定
45.12.15	1970	白川村の「大窪水ばしょう」を天然記念物に指定
46.12.14	1971	白川村「荻町の合掌集落」を重要伝統的建造物保存地区に指定
昭和46.12.28	1971	白川村・御母衣の「田遠山家住宅」を重要有形文化財に選定
47.11.20	1972	「シナノキ避難小屋」竣工
48.6	1973	「別当出合駐車場」竣工（45年～継続）
48.7.4	1973	中宮温泉入口・蛇谷沿いに「石川県白山自然保護センター」開館（鉄筋コンクリート一部中二階 延1,231m²）
48.11.5	1973	富山県「五箇山の唄と踊り」を無形文化財に選定
50.10.30	1975	南龍ヶ馬場に「南龍山荘」竣工（鉄骨二階建276.3m²）畳6×5、２段ベッド24人×４
52.8	1977	「白山スーパー林道」開通（42年11月着工）……石川県尾口村と岐阜県白川村を結ぶ……延長33.3km

◀故細川元孝氏奉納の方位盤取付作業▶



駒草会有志による故細川氏顕彰記念碑

登山コースの充実と推移

白山開山当時には登山コースといった山道があったはずはなく、何とか歩けそうな尾根を踏み分け、特に困難な所はブッシュを伐り開いて進む、といった具合で、永い年月の間にだんだん踏み跡は歩き易くなり、伐り開いた難所も少しづつ改良されて、数百年を経て漸く使える程度の山道が出来上り、支障のないコースとして利用されるようになった、と想像される。

このようにして近代に近い100年或は200年頃に出来上っていたコースとしては、養老の頃（或はそれ以前）からの白山登拝の望みに基づく信仰基地としての遙拝所として造営された。次の３馬場を基点として白山に到達する３線がある。

美濃禅定道（南縦走コース）

駿河・遠江・三河・尾張（静岡・愛知など中京方面）からは、長良川を遡り、白山中宮長滝神社（岐阜県白鳥町）を発して檜峠――石徹白(中居神社)――銚子ヶ峰――一ノ峰――二ノ峰――三ノ峰――別山――油坂――南竜ヶ馬場――御前坂を登って白山

越前禅定道

越前（福井）方面から九頭竜川を遡り平泉寺白山神社（勝山市）を基点として三頭山――一本松――小原峠――三ツ谷（現在は離村して部落なし）――白山温泉（昭和９年７月の洪水の為流失)――六万部山(六万山）――柳谷と湯ノ谷の分水稜線――黒ボコ岩――白山

加賀禅定道

加賀・能登（石川）方面からは鶴来・白山比咩神社を基点として手取川を遡り、瀬戸――中宮――尾添を経てハライ谷――目附谷と丸石谷の分稜を四ツ塚山――大汝峰――白山

その他のコースとしては、

白川郷平瀬で白川街道に岐れて大白川を遡り――大白川温泉（昭和39年大白川ダム……御母衣第二ダム……建設の為水没）別山谷を遡って地獄谷との分稜を登り、南龍ヶ馬場の山姥谷を降って美濃禅定道に合流、と元の大白川コースが一番古く、天保12年（1841年）頃には已に登山路として利用されていたらしく、信仰心のあつい奥飛弾白川郷の人達によって、美濃道を利用するには余りに遠廻り（約30km）で不便な為に開設されたものと思われる。

このコースは大正末期まで利用していたが、難所続きのため、大白川温泉から大倉尾根を登りカンクラ雪渓を利用して御前峰の東に達して南側を巻き、室堂に到る（現在のコース）ように改修したが、雪渓があまりに永く、危険が予想されるため、昭和の初期には雪渓を捨てて尾根を伝うよう改修して今日に到っている。

一ノ瀬から柳谷を昇り――岩山谷川（岩屋俣谷）の右岸を遡って三ツ岩を経て別山谷川と井谷川、更に畜生谷との振分稜を昇り、別山室（追分）で美濃禅定道に合流するコース（このコースは昭和の初期迄利用されていた）

岩屋俣谷と柳谷川との分水稜線を昇り、別山・御舎利山で美濃禅定道に合流するコース（現在の別山コース）……大正初期に開設され、十数年間一部の人達によって利用された。

その後開設されたものは、登山が漸く一般化するに到った昭和期以後に集中していて、年代順に次の通りである。

大正10年　**岩間温泉元湯コース**

尾添――ハライ谷を渡り、更に丸石谷を吊橋で渡って中ノ川との分

稜に到って（ここ迄は旧山道……出作り道……現在車道——中ノ川の中腹を横断して元湯——薬師山——長坂——清浄ヶ原（北龍ヶ馬場）——四ツ塚で加賀禅定道に合流（以後禅定道は尾添——四ツ塚間の利用者は漸次無くなる。）

昭和初年　**砂防新道**

柳谷を主とする手取川の最奥部が手取川洪水の根源である為初められた治水（砂防）工事は、大正元年、石川県の直営で中飯場に、翌２年には高飯場に、夫々工事基地を設置して工事が進められ、昭和２年には当時の内務省に引き継いで国の直轄事業として施行されたが、その為の資材運搬路（歩道）を右岸沿い中腹に築設したので、大正末期からその歩道を利用するようになり、昭和の初めには甚之助谷から黒ボコ岩に取り付いて越前禅定道に合流するよう延長して、工事用道路を其のまま利用して今日に到っている。(現在の砂防新道)

昭和５年　**釈迦ヶ岳コース**

市ノ瀬——旧白山温泉——湯ノ谷（此ノ間営林署・治山工事用歩道利用）——湯ノ谷と支流丸岡谷との分水稜線を釈迦ヶ岳——四ツ塚で加賀禅定道に合流。

昭和５年　**箱抜（科倉）桟道新設**

大白川コース・箱抜峡谷は稀にみる絶壁で、登山路は大白川沿いに十数個の小谷を昇り降りする難路であるため、この年約400ｍの断崖にヒノキ材二ツ割の吊桟道を設けて通行を容易にした（この桟道は昭和９年７月の白山を中心とする大洪水のため流失。）

昭和10年　**ゴマ平コース・北縦走路**

中宮温泉——清浄坂——湯谷頭—しなのき小屋——カンバ坂——いちい坂——ゴマ平(以降北縦走路)——ゴマ峠——三俣峠（以降県境稜線）——うぐいす平——地獄のぞき——北弥蛇ヶ原——お花松原——翠ヶ池で加賀禅定道に合流。

昭和24年　**観光新道**

白山観光協会設立記念事業として開設したもので昭和23年着手。別当出合で砂防新道に岐れ——市兵ヱ茶谷（現在はアト）——別当谷の右岸・中腹を殿ヶ池で越前禅定道に合流……現在は改修して市兵ヱ茶屋アト——越前禅定道の別当坂を利用——畜生谷——殿ヶ池。

昭和26年　**刈込コース**

鳩ヶ湯温泉コース——小池（跡）——刈込池……此の間部落道利用——二ノ峰の北で美濃禅定道に合流。)

昭和29・30年　**岩間温泉コース(楽々新道)**

岩間温泉を岐点として、丸石谷と中ノ川との分水稜線を登り、見返坂で元湯コースに合流するもので延長6,744ｍ。

昭和32年　**三方岩岳コース**

元々登山道があったものを、この年改修して整備したもので、馬狩部落(現在廃村)から白谷を渉り、稜線に沿って三方岩岳に登る（北縦走路に合流）

昭和37年　**砂御前コース**

白峰——青柳山——砂御前山——鳴谷峠——シゲジで釈迦ヶ岳コースに合流。

昭和37年　**湯ノ谷コース**

釈迦ヶ岳コース釈迦ヶ岳の奥部で岐れ——湯ノ谷を渉り——千蛇ヶ池尻の草原を縦断して——直接室堂に到達する。崩壊部分多く危険を伴う慮れあるため（昭和52年廃道とする。

昭和39年　**蛇谷探勝コース**

中宮温泉——蛇谷沿いを遡り——蛇谷荘を経て蛇谷噴泉——しし見峠——国見山（これより北縦走コース）——フクベ山——三方岩岳。

昭和39年　**北縦走コース**

細尾峠——小瀬峠——袴腰山（越中富士）——三方山——猿ヶ山——ブナオ峠——大門山——大笠山——笈ヶ岳

昭和39年　**南竜コース・エコーライン**

甚之助ヒュッテから間もなく、南に分岐して南龍ヶ馬場。南龍センターで南縦走コースに合流する…南龍の入口から万才谷沿いに草原を縦断して弥陀ヶ原・五葉坂の麓で室平へのコースに合流する。

昭和40年　**鳩ヶ湯新道**

刈込池キャンプ場から直接福井・石川の県境に取り付き稜線を三ノ峰で美濃禅定道に合流。

昭和41年　**噴泉塔・蛇谷探勝コース**

噴泉塔から湯谷頭……霧晴峠……更に蛇谷・コヤ谷口へと横断するが危険ヶ所あり。昭和52年廃道とする。

昭和42年　**アルプス展望コース**

南龍ヶ馬場・南竜センター……山姥谷沿いに岐阜県境に達し、ほぼ県境沿いに登って大白川コースに合流。

昭和43年　**別山コース**

白山温泉……柳谷川と岩屋俣谷との分稜を登って別山・御舎利山で南縦歩コースに合流するもので、約50年前の道を再改設した。

故玉井敬泉画伯の功績をたたえ、黒ボコ岩の背面に埋め込んだブロンズ像　（昭和38年８月）

白山に「ライチョウ」移殖を、とする調査

環境庁は、今、絶滅に頻している特別な鳥獣の保護問題を検討するため、49年8月、増殖対策委員会を設け、このなかで、ライチョウについては、その生息する環境における保護増殖の他に、生息地域を拡げる為の方法をも実施すべきである、と云う意見に集約されたことで、この意見に基づき、50年7月25日、同庁に信州大学羽田健三教授を座長とするライチョウ移殖調査委員会が設置された。

この委員会で検討の結果、50年度において、かってライチョウが生息していた、と云う白山地域で、移殖の可能性、環境条件についての調査を行うこととなり、この調査は、8月下旬から9月上旬にかけ、白山地域において、羽田教授を長とする総員11名が現地に入り、

①ライチョウの絶滅原因・鳥獣の生息現況・被食昆虫現存量などの鳥獣調査

②食餌植物・遮蔽植物の分布などの植物調査

③気象・雨量・積雪量などの気象調査

④寄生虫・病源菌などの疾病調査

を実施した。また、以上の調査を取りまとめ、これに基づいて移殖の可否を判断することとし、生息が可能で、且つ地元のコンセンサスが得られれば、52年にも立山から移殖したい。と云う意嚮の下に、前記の調査に先立ち8月28日、この事業に対する協力要請を兼ねて、説明会を金沢市で開催したが、参加者は約80名、真面目に且つ真剣な意見が多く出され、その結果、移殖論のコンセンサスはとられておらず、尚議論が必要である。

当面、現在の生息地の保護を優先すべきだと云う方向で報告書を作製すべきである、等の結論的理由で、この問題は当面「見送り」の形となった。

昭和初期までライチョーが棲んでいた大汝峰北斜面